

program

- 司会
ガデミアミン (大阪大学大学院人文学研究科准教授)
- 13:30-13:50 拠点長挨拶 趣旨説明
宮本陽一 (大阪大学理事・副学長 / 大阪大学グローバル日本学教育研究拠点長)
宇野田尚哉 (大阪大学グローバル日本学教育研究拠点・副拠点長)
- 13:50-15:20 講演
講演 1
アデドゥイン・アグオル (イバダン大学教授 / アフリカ日本学会会長)
Japan-Africa Relations: New Horizons,
Challenges and the Role of the African Association
for Japanese Studies
- 講演 2
エルハディディ・アブデルラフマーン (カイロ大学専任講師)
中東における日本語教育——エジプトを中心に
- 講演 3
松原モラレス礼子 (サンパウロ大学准教授)
ブラジルの日本研究動向——サンパウロ大学を中心に
- 15:20-15:30 〈休憩〉
- 15:30-16:40 討論
ディスカッサント
ファクンド・ガラシーノ (大阪大学グローバル日本学教育研究拠点特任講師)
福田義昭 (大阪大学大学院人文学研究科准教授)
安部麻矢 (大阪大学マルチリンガル教育センター特任講師)
- 閉会の挨拶
ガデミアミン



アデドゥイン・アグオル
イバダン大学教授
アフリカ日本学会会長



エルハディディ・
アブデルラフマーン
カイロ大学専任講師



松原モラレス礼子
サンパウロ大学准教授

大阪大学グローバル日本学教育研究拠点主催
国際シンポジウム

Globalizing Japanese Studies in the Age of the Rising Global South

2025年 12月13日 [土] 13:30-16:45

大阪大学箕面キャンパス外国学研究講義棟1階 大阪外国語大学記念ホール

<https://www.osaka-u.ac.jp/ja/access/top>

言語：日本語・英語 (同時通訳あり)

主催＝ 大阪大学グローバル日本学教育研究拠点

共催＝ 大阪大学グローバル日本学教育研究拠点「拠点形成プロジェクト」

Learning from and Promoting the African Association for Japanese Studies (代表 ガデミアミン准教授)

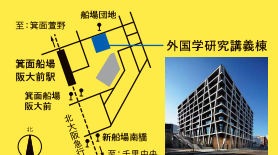
お問い合わせ gjs@ml.office.osaka-u.ac.jp

登録締切 日本時間 12月10日 [水] 15:00 JSTまで

下記のリンクまたはQRコードから12月10日 (水) 15:00 JSTまでにご登録ください。
https://us02web.zoom.us/webinar/register/WN_ltlwVddsRjqWD2enPzSCMw
同時通訳の音声は、Zoom ウェビナーを通じて配信いたしますので、対面参加で同時通訳をお使いになる方は、ご自身でパソコンとヘッドセットをご準備ください。



ウェビナー
参加登録



趣旨説明

「国際日本研究」や「グローバル日本学」が語られるようになって、およそ 10 年が経ちました。この間に、日本の日本研究と海外の日本研究との連携は、格段に強化されました。2017 年に正式発足した「国際日本研究」コンソーシアムに国内 25 機関・海外 62 機関が参加するに至っている点はその端的な証左ですが、大阪大学のグローバル日本学教育研究拠点もそのような動向のなかで中核的な役割を果たしてきました。

このような連携強化は、アジア研究・日本研究の確固とした国際的学術組織がすでに存在している地域、すなわち、北米、欧州、東アジアなどに所在する諸機関との関係を中心に進められてきました。現時点では、その成果を踏まえつつ、より広い地域、すなわち、「グローバル・サウス」の日本研究機関との連携強化が、喫緊の課題となっています。

「グローバル・サウス」は、政治的・経済的含意において用いられることの多い言葉ですが、本シンポジウムでは、そのような含意を踏まえつつも、近い将来に日本研究が全面的に展開されることが期待される地域、という意味で用いています。今回、具体的には、アフリカ、中東、ラテンアメリカの、中核的日本研究組織・機関から登壇者をお招きし、それぞれの地域・それぞれの国における日本研究の関心の所在や将来の展望についてお話いただき、それぞれの背景や特徴を理解したうえで連携するきっかけを、大阪の地において創り出していきたいと考えています。

ところで、「グローバル・サウス」においては、日本においてはとは反対に、人口が急速に増加しつつあります。少し長い目で見れば、日本語・日本文化の学習者、そして日本研究に従事する研究者が増加する最も大きなポテンシャルは、ここにあるとあってよいでしょう。そのようなポテンシャルを秘めた人びとの知的関心において、「日本」が後景に退いてしまうことのないようにするためには、それぞれの地域の中核的日本研究組織・機関と日本の日本研究機関が相互理解を深め連携を強化し、両者の連携のもと日本研究のプレゼンスを高めていくことが不可欠であると考えます。そして、そのような新たな連携の強化は、日本における日本研究をもより豊かなものにしていくはずで

す。

この機会に、20～30 年先を見据えつつ、各地域からお招きした登壇者の先生方とともに、「グローバル日本学」の未来を展望したいと思います。多くの方々のご参加をお待ちしております。

Japan-Africa Relations: New Horizons, Challenges and the Role of the African Association for Japanese Studies

Adedoyin AGUORU

University of Ibadan, Professor; African Association for Japanese Studies, President

Japan-African relations since the earliest times till date is the concern of my presentation which engages the experiences which have defined Japan as a nation and also defined the joint experiences of the fifty-four nations that make the African continent. These experiences, and the resilience with which these nations have remained strategically positioned in global politics and in the international community make up the crux of the engagement of the African Association for Japanese Studies in Africa. Having been colonised largely by the West, I purposively began to take interest in the East, particularly Japan post World War II, to see how countries outside of Europe and Americas that Africa related closely with pre and post colonialism deconstruct their world. This presentation explicates, among other things, the significance of activities of the African Association for Japanese Studies in Africa in fostering mutual understanding between Japan and the African continent since inception of the Association in 2017 till date. The significance of the recognition and commendation it has earned from the Japanese government through its Embassy in the Federal Republic of Nigeria, the intellectual and academic contributions to scholarship in Nigeria and in Japan as well as institutional collaborations impacting trade and industry and the future prospects are also elaborated upon. It concludes on concerns on contemporary perceptions of Japan about Africa that requires deconstruction and reconstruction for the potential diplomatic symbiotic relationship that relating with Africa offers.

Key words: Japan-Africa Relations, Diplomatic symbiotic relationship, African Association for Japanese Studies



Prof. Adedoyin Aguoru is Professor of Transnational and Transcontinental Studies and Director of the Centre for Excellence in Teaching and Learning at the University of Ibadan. She is a recipient of the prestigious Ambassador's Commendation Award of the Embassy of Japan in Nigeria and has been recognized for her work in igniting interest in Japanese Studies in Nigeria and Africa by establishing the African Association for Japanese Studies (AAJS), Studies in Transnational Africa and Japan (AAJS Journal) and the African Association for Japanese Studies Students Club (AAJSSC). Her laureate awards from the Study of the United States Institute on Contemporary American Literature and the CODESRIA Gender Institute notably connect Africa, the United States, and Japan in a rewarding manner. She serves as a member of the CODESRIA Scientific Committee and is an Established Opinion Leader of the US Embassy in Nigeria. Through her work, Prof. Aguoru connects theory, practice, scholarship, and craft to international politics and transnational influence. Her creative works, such as *Refugees of the Great Lakes* and *She*, showcase her versatility as a transcontinental dramatist.

中東における日本語教育—エジプトを中心に

エルハディディ・アブデルラフマーン

カイロ大学専任講師

第4次中東戦争に伴うオイルショックを契機として、中東・アフリカで初となる日本語学科が、エジプトのカイロ大学に設置された。この出来事は中東地域における日本語教育発展の端緒となり、その後は多くの国で日本語コースが設けられ、第二外国語として日本語を学べる環境が整えられていった。なかでもカイロ大学の日本語学科は、中東における日本語学科開設の推進役を果たしており、その卒業生は、サウジアラビアのキングサウド大学（1994年）やイラクのバグダッド大学における日本語学科設立に重要な役割を担った点が注目される。

さらに、同学科にはアラブ諸国をはじめ、日本に関心を持つ中東地域の学生が入学し、日本語を専門的に学ぶ学習者層が形成されている。現在では大学院も併設され、同学科出身の研究者・教師がエジプト国内外で日本語教育・日本研究に携わっているほか、日本語、日本思想、日本文学などを対象とする国際学会も開催されるなど、中東における日本語研究の中心的拠点として発展を続けている。



カイロ大学専任講師

大阪大学にて博士課程を修了

エジプトのバンハ大学・ミスル大学・アスワン大学にて非常勤講師

国際交流基金 2024 年度フェロー

大阪大学招聘研究員

ブラジルの日本研究動向—サンパウロ大学を中心に

モラレス松原礼子
サンパウロ大学准教授

本報告はサンパウロ大学における文学部・東洋学科の日本語講座について、過去と近年の大学院と学部の研究動向を概観すると共に、いかにブラジルという文脈で日本研究を維持・継続できるかを考えるのである。同学部は1964年に設立、大学院は1996年で、来年で30周年を迎えることになる。大学院は、ブラジル高等教育支援・評価機構（CAPES）がブラジル全国にある大学院（修士・博士）のプログラムを評価し、研究を促進し、奨学金を決定したり、全体の質の向上を管理している。評価の一環として、以前は論文の数や研究者養成、卒業後の進路のフォローなどが主な評価基準であったのに対して、最近ではアカデミックの枠を超えた、一般人に対する科学の波及効果やアカデミックイベントだけではなくエクステンション型のイベントのインパクト、大学が基礎教育における貢献度、国際化などが評価の対象として重要視されていることが挙げられる。ブラジルの研究はブラジルの南西（サンパウロ、リオ、ミナス、パラナ州の大学）に集中していることの是正を図ったブラジル連邦政府は北や東北、中東地方などの教員や大学院プログラムが優遇される措置がいくつか設けられている。日本研究に特化した大学院としてスタートして本大学院は初年度に比べると研究の対象や内容、研究生自身のプロフィールが変容、年々非日系の方が人文科学の研究に増加していることがわかる。研究内容も伝統的な国語学・日本文学から最近では漫画・アニメをはじめとするポップカルチャー、日本語教育、移民研究などと増えてきている。

グローバル・サウスという言葉には様々な絡み合った問題の中にやはり貧富の差が一つの大きな要因になるだろう。ブラジルの場合、南米全体の類似点として、教育の差異が一つの問題として出てくる。それは、最近ではインクルージョンと所属意識を基軸に考える方針でマンモス大学のサンパウロ大学においても、黒人、褐色系、先住民への補正措置として割当制度が設けられるようになり、黒人や先住民であることは自己申告をし、高校の全課程を公立で勉強した者には大学に入れる枠が今年で50%まで伸びている。また、門を開けるだけでなく、入学後も学力不振でドロップアウトにならないように、未然に防ぐ対策として補助金の制度も設けられ、食事や宿泊の補助がされるようになっている。言語も母語を含め、研究に不可欠な諸外国語もブルデューの言う文化資本であり、研究へのアクセスとしていかに民主的に全ての学生の手渡るかなど考えるのである。日本の文部省からも留学する機会も与えられてあるが、この「日本研究」というマイナーな立場から、しかもグローバル・サウスに属するブラジルで、いかに今後の日本研究の進展に貢献できるか考えるのである。



サンパウロ大学東洋文学学科日本語講座准教授、同大学日本語日本文学日本文化大学院プログラム教務主任。研究分野は応用言語学、日本語教育史、言語のバリエーション。サンパウロ大学日本語日本文学日本文化大学院修士（2001）、同大学言語学博士（2009）、サンパウロ人文科学研究所理事長（2021-2023）。
主要論文：“De língua de imigração a língua de estudo: caminhos para revitalização da cultura e da língua japonesa no âmbito paulista,” *Revista Linguagem e Ensino* (2020), “The Ongoing Mobilities of Japanese Brazilians: Language Ideology, Identities and Language Education,” *Multilingual Brazil: Language Resources, Identities and Ideologies in a Globalized World*, Routledge (2017).

Discussants

Facundo GARASINO



Facundo Garasino is a Specially Appointed Lecturer at the University of Osaka Global Japanese Studies Education and Research Incubator, where he teaches courses in migration studies, modern Japanese history, and academic skills for the humanities. His research interests center on transnational issues of migration, intellectual and cultural history, and nation and state-building in Japan and Latin America. His recent project focuses on the flows of Japanese settlers, crops, and technology in the Brazilian Amazon and the links between Japan's imperial expansionism, postwar national reconstruction, and Brazil's policies of development and nation-building during the twentieth century.

福田義昭



大阪大学大学院 人文学研究科 外国学専攻 准教授
大阪外国語大学大学院博士後期課程修了
博士（言語文化学）
専門はアラビア語・アラブ文学

安部麻矢



Maya Abe holds a Ph.D. in Literature and specializes in sociolinguistics and descriptive linguistics. Her research focuses on the Mbugu language of Tanzania, based on fieldwork-driven language documentation. She is also engaged in supporting autonomous multilingual learning.

Incubator-Supported Project

Learning from and Promoting the African Association for Japanese Studies

Amin GHADIMI

Graduate School of Humanities, Associate Professor

“Japan will laugh together with, and exert itself together with, all the people of Africa as we work toward the resolution of each and every issue Africa is facing. This is not for the sake of Africa, nor is it for the sake of Japan: it is for the sake of the world.” So said our prime minister, Ishiba Shigeru, in his closing speech for the Ninth Tokyo International Conference for African Development (TICAD 9), a gathering attended by representatives of 49 African countries and resulting in the landmark Yokohama Declaration. Prime Minister Ishiba continued, borrowing the words of the eminent scientist Noguchi Hideyo when Noguchi was studying yellow fever in Ghana: “I have not come to teach. I have come to learn.”

This project, “Learning from and Promoting the African Association for Japanese Studies,” represents one, obviously small step in the broad endeavor expressed by Prime Minister Ishiba, an endeavor in which earnest collaboration between Japan and countries in Africa is both the means and the end. The project seeks to draw out insights from, and in turn further develop, the study of Japan across the African continent through cooperation with the African Association for Japanese Studies and other institutions and organizations. It recognizes the signal achievements of that association in advancing Japanese studies, and it also sees opportunities for further growth and expansion. The project is preliminary and exploratory: it seeks to identify what chances and possibilities there might be for the promotion of research and education in Japanese studies at African universities; to form a vision to that end; and to take steps to enable the realization of that vision. It seeks to affirm and establish the relevant organs of the University of Osaka as earnest contributors to the study of Japan in Africa. And, following TICAD 9, it seeks to pay special attention to the promotion of scholarship on Japan among young people and

women.

That Africa is the future is both a truism and an urgent exhortation. As Prime Minister Ishiba observed, one out of every four people on Earth in 2050 will be African. “Africa will lead the world,” he predicted. And as he candidly acknowledged, the rise of Africa is occurring as Japan appears to be slipping in its relative global stature. “In the 1990s, Japan accounted for roughly 17 percent of the world’s GDP. Today, that figure is about 4 percent,” he conceded.

The apparent relative decline of Japan’s global power does not in any way imply an attenuation in the importance of the study of Japan. This project departs from the conviction that the study of the history, literature, and culture of our country is meaningful and beneficial to all people in all places, and it is for that reason that access to and generation of knowledge about Japan must develop in Africa as Africa comes to lead the world. Prime Minister Ishiba gestured at the import of learning from the Japanese past: “We must never again repeat a great war,” he declaimed. “Nuclear weapons must never be used.” But of course, the study of Japan is not confined solely to knowing about the horrors that we brought about and that were inflicted on us. It is to African scholars and scholars in Africa that we now turn to learn anew what about Japan to study and how to study it—for the precise purpose of eliminating the bifurcation between African and Japanese scholars and developing a single, unified, and variegated field of Japan studies.

This project intends to provide value to universities and relevant associations in Africa by opening up greater opportunities for them to learn about research and education in Japan about Japan. It hopes to provide value to Japan by promoting knowledge of our country in countries that will come to lead the future. But as Prime Minister Ishiba himself implied, the ultimate beneficiary of this incipient network, if it succeeds, is not any one group of people: it is the study of Japan itself.



Amin Ghadimi is associate professor in the Division of Language and Culture at the University of Osaka. He studies the history of thought and of political culture in 1870s and 1880s Japan. His most recent work examines the global ideational dimensions of student rioting in Tokyo in 1885.



大阪大学グローバル日本学教育研究拠点

The University of Osaka Global Japanese Studies Education and Research Incubator